北海学園大学附属図書館報

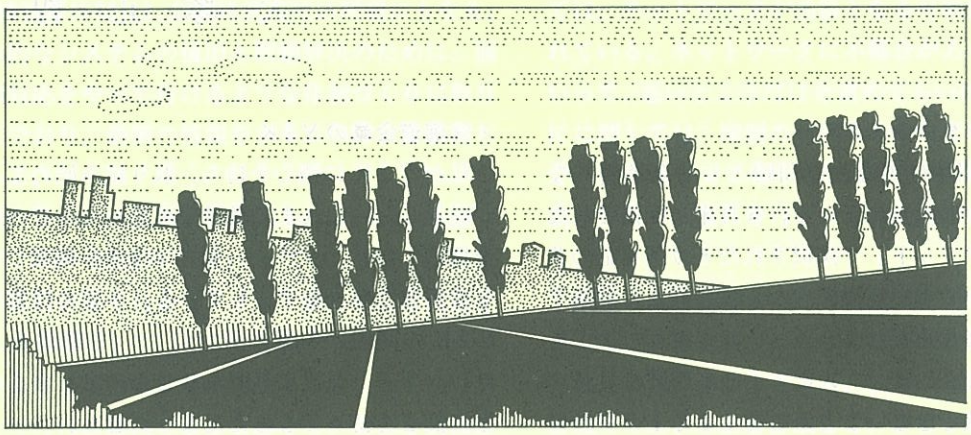
図書館だより

1999.9.20

第21巻3号

通巻151号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



ポプラ並木の風景

カットと文　須田邦昭

ポプラは、ほうきが逆立ちしたさまにたとえられる。明治期の外来種である。その姿態は自生の木々に比べ異形と言える。ポプラは、群れてこそ自然である。スカイラインはどの並木より簡明であって、異彩を放つ。概ね開拓に伴う防風林として植えられたであろう。風に強いほどでもないと聞く。速い成長が作り出す風景に、自然とせめぎ合うような強い表現力を想ったのかもしれない。

小林多喜二の小説「防雪林」もその表現力について考えさせる。主題は、地主と警察に対する貧窮な開拓農民の闘争であり、悲惨な生活、過酷な自然が強烈に描かれている。

ポプラ並木は、貧村から12kほどの所に整列する。その向こう側は鉄道駅のある町、地主と警察の住む領域である。小作料の支払いに耐えきれず、猛烈な雪の中、陳情に向かう。手先となった警察に弾圧され引き返す。夜の闇にまぎれ主人公が単身、地主の家に向かい、放火して逃げ戻る。

ポプラ並木を境にして行き来する緊張と失意と不安。その時ポプラ並木は、乗り越えるべき城壁、逃げ戻るべき擁壁のようである。ポプラ並木のこちら側は烈風を受け、向こう側は文明を享受する。ポプラは吹雪に揺れて、しなり、うなる。その姿勢は、あたかも意思を持ち、互いに異なるもののあいだに割って入る「閾」のようである。

開拓。無限の荒野に飲み込まれそうな意識。僅かに根付き始めた文明。その境域の風景を、ポプラ並木こそがふさわしく演じてきたのではないか。

札幌では石狩街道沿い、真駒内通り、北大構内のものが知られている。無名のものもある。それぞれに、まつわる動機と営為があったであろう。

年老いたポプラ並木の風景は、北海道の開拓を語って生き長らえる遺蹟のように思えてくる。

（すだ　くにあき　工学部教授　建築計画・意匠）

■ p.2-3. 西暦2000年問題の現状と課題　■ p.4-5. 部室拝見③中国語研究会　■ p.6. とよひらの空に虹をかけよう　■ p.7. 図書館開館時間変更のお知らせ　■ p.8. 日本式カタカナ英語を考える（その一）

西暦2000年問題の現状と課題

犬塚正智

・カウントダウンＹ２Ｋ

2000年問題は国際的な問題として全世界的な取り組みが進められている。６月末に開催された「ケルン・サミット」で採択された８カ国首脳の共同宣言の中でも、危機管理などで共同して対処することが盛り込まれている。

Ｙ２Ｋ問題とは、コンピュータが西暦の日付を正しく認識できないことから発生するトラブルの総称である。その問題の解決のためには、コンピュータ・システムの手直し、データ・ベースの修正、ハードウェアのクロックシステムやBIOSの修正、マイクロチップの交換など、単調で多くの手間暇をかけた取り組みが必要になる。企業は日付にかかわるシステムを多く抱えており、このところ対応策を慌てて推進するところが激増している。いわば駆け込み的な対応をせざるを得ない企業が多く、長期の景気低迷へのリストラ策とも重なり、経営トップにとっては頭の痛い問題である。万全な体制でＹ２Ｋに対応することが大切であるが、緊急時の「危機管理体制」をどうするのかも重要な課題である。今後はコンピュータシステムの修正から、緊急時の危機管理へと重点が移るだろう。

「問題対応への手抜かりから第三者に被害を与えた場合には損害賠償の対象となる」との見解が表明され、世界的なコンセンサスになろうとしている。Ｙ２Ｋの対策を見送ったり、意図的な手抜きがあった場合には、その賠償額は、天文学的な数字になることも予想される。

・北海道企業のＹ２Ｋ

私がＹ２Ｋに関心を持ち、取り組み始めて５年が経過した。これまで業界や市民レベルでの対応を協議したり、ソリューション技法を提案したりして多忙な日々をすごしている。本学の授業でもＹ２Ｋの問題の本質や現状について講義をしたり、レポートを提出させたりしたので、多くの学生に関心を持ってもらえたように思う。

北海道の中小企業を中心に、Ｙ２Ｋセミナーを開催したり、ソフト会社やベンダーと普及活動に取り組んだり、まさに時間との闘いである。残念ながら現状は、企業の取り組みが遅れ気味で、多くの問題を積み残したまま、2000年を迎えそうなのである。コンピュータソフトの修正やシステム再構築を済ませた企業は、全体の約60%、中小企業に関しては問題の先送りや対策の遅れが目立っている。「プレ2000年問題（2000年まで）」は、大きな進展は望めそうにないというのが私の実感である。言霊信仰（はっきりといってしまうとそれが真実となる）と政府主導の行政手法が問題解決を遅らせ、コンピュータ・メーカーも儲かるところには取り組むが、そうでないところには自分たちは知らないとか、関係ないといっている。最近駆け込み的に情報公開や広告を出して、しきりに問題の自己責任を主張する始末である。社会全体に対して、それらの企業がどのように責任を全うし、貢献して行くのかという視点が欠けている。私は、北海道マルチメディア推進協議会（HOMO）に関わっていて、企業の2000年問題対応に真剣に取り組んでいる。そこでは、ボランティアで企業

経営に関する質問、修正作業ツールの普及、システム再構築、ハードウェアの手直しなど、万全の体制を整えている。ネガティブな取り組みから、むしろ積極的な経営革新につながるような企業経営の提案をしている。

さらに、今後は「アフター2000年問題」の対応が重要性を増してきた。問題が発生した後の対応、「危機管理体制」は、企業経営の死活問題にもなる。抜本的なシステムの復旧と問題解決のために、個別の対応をやって行けるような体制づくりに取り組んでおり、最新の情報をホームページで公開している。

http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/～inuzuka/

「アフター2000年問題」としては、今後3年程度をめどに企業や社会システムで積み残した問題を少しずつ解決して行くことを指す。

さまざまな社会問題が発生しても、しっかり対応して行けば解決できると思うし、これを契機にコンピュータ社会の実態について研究されるのも良いかもしれない。

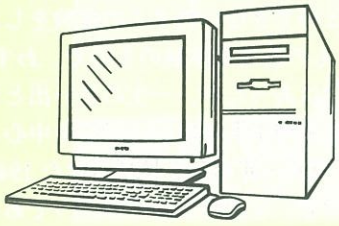
・ネットワーク社会とＹ２Ｋ

コンピュータのデーターベースが社会や経済活動の中核を担うようになっているのが、今日の高度情報化社会の特徴である。例えば、図書館の書籍データーベースや大学データ・ベースは単独であるのではなく、ネットワークによって複雑に繋げられ、活用されている。みんなが利用できる環境があり、さまざまな目的でアクセスされている。既に多くのコンピュータがインターネットに接続されており、ネットワークは社会生活や企業活動に深く根をおろしている。ただ、Ｙ２Ｋ問題に関しては、ネットワークが凶器となる可能性が指摘されている。ネットワークに不都合があったからといって、悪いところだけを責めてもいけない。Ｙ２Ｋに関しては、問題の解決にあたっては自己責任で、被害やトラブルの処理にあたっては、協力体制を作って、痛み分けといった発想が必要であろう。

本年３月に米国のＹ２Ｋの視察に出かけたが、みんなで課題を共有して、のびのびと取り組んでいたというのが印象である。市民レベルで、「危機管理マニュアル」を作成して、アクションプランを決めていたり、情報をオープンにしていろいろな知恵を出せるような取り組み方をしていた。

危機管理対策をいかにやって行くか、世紀のイベントにふさわしい賢明な対応が望まれる。

（いぬづか　まさとも　経済学部教授
経営管理論）



部室拝見③

中国語研究会

会長　多　田　州　一

文化棟四階を拠点に地道な活動を続けるわが中国語研究会は、今年15年目を迎えるほのぼのとした明るい雰囲気のサークルである。在籍会員は30余名を数え、週1回の勉強会を軸としたさまざまな活動が展開されている。発足以来15年も経つと発足当時の状況はわからなくなるが、1984年に中国・中国語に興味を持った数名の学生の手によって中国語愛好会が結成されたのが、全ての始まりだったと聞く。中国に対する認識を深め、中国語能力の向上を目指すという発足当初からの会の方針は、大所帯になった今日でも変わらない。そして、当会成長の背景には、中国語担当の城谷武男・大谷通順両先生の御指導・御力添えがあったことはまた周知の事実である。

他方、今年の5月には研究会以上の大所帯（60余名）になったOB会が、「中国語時習会」という新たな組織として発足した。今後も時習会との連絡を密にしながら、研究会としてよりよい姿を模索していきたいと考えている。

本稿では中国語研究会の主な活動について、私見ではあるが簡単に御紹介したい。

夏・冬の合宿

毎年8月と2月に札幌近郊の温泉地（洞爺、定山渓、支笏湖等）で中国語学習を主体とした合宿が催される。夏は2泊3日、冬は1泊2日でサークル会員の他、一般参加の学生たち、本学の中国人留学生と一緒に都会の喧騒を離れ、大自然の中で日頃の授業とは一味違った勉強会が行われる。そして夜の大宴会では、参加した学生たちが明け方まで顧問の大谷先生を囲んで賑やかなひとときを過ごすのである。

北海酒家

十月祭での中華料理店「北海酒家」の出店は、中国語研究会にとって年間最大のイベントで、10月の初頭に会員全員が集まってメニュー・値段の決定から当日の役割分担まで、慎重な討議が行われる。特にここ数年来、一人暮らしの学生の家で試食会を開き、当日の営業には万全の体制で臨んできた。

十月祭での中華料理店は数少ないが、とりわけチャーハンについては中国語研究会の専売特許で、昨年は前代未聞の300食完売を達成した。また、限定発売の青島（チンタオ）ビールも毎年早期に売り切れるほどの人気商品である。

今年も皆様の御来店をお待ちしている。

北海中文

中国語研究会の機関紙「北海中文」は、元々サークル内の会報的性格を持つ小冊子であったが、最近では業者に委託して、150～200部刊行している。主な記事は何といっても「中国語研修旅行体験記」で、短期留学に参加した学生たちの貴重な体験談がふんだんに掲載されていて、大変面白い。中国に興味を持っている方や今後留学を考えている方にお勧めの書である。

今年の7月に刊行された「北海中文」最新号（第24号）は、まだいくらか在庫があるので、興味のある方は文化棟四階の部室までどうぞ。（勿論無料配布）

中国語研修旅行

1999年2月21日、今年も14名の同志が海を越え中華の地を踏んだ。わたしも団員の一人として今回の研修に参加し、日本にいたのでは絶対に経験することのできない数多くの体験をした。見るもの・聞くもの全て未体験のもので、わずか36日間の滞在ではあったが、一生の思い出となった。留学先の北京理工大学は、工学部を中心として理系・工系・文系・管理系を結びつけた1940年創立の総合大学で、全国重点大学の一つである。

北京での3週間は理工大の招待所に宿泊し、個性豊かな先生方による楽しい授業と本場の中華料理によって、わたしたちは中国での生活を十二分に満喫した。寧汝新副校長、外事弁公室主任何中一先生をはじめ、前主任の潘恒生先生、応用物理系の鮑重光先生ら皆さんとても親切で、親身にお世話してくださった。又、授業で習ったことがらを早速外で実践（例えば買物）することによって、上達も速いこと間違いなかった。

加えて、わたしは何名かの理工大の学生たちと交流の機会を積極的に作っていたこともあり、彼ら・彼女らとの忘れられないたくさんの思い出ができた。

そして、理工大での3週間の学習後、残りの2週間で西安・杭州・無錫・宜興・蘇州・上海・瀋陽をまわり、名勝旧蹟を尋ねて見聞を広めた。又、壮大な大自然の絶景は、わたしたちの脳裏に深く焼きついた。中国には「上有天堂下有蘇杭」という格言があるが、蘇州と杭州の絶景は、正にこの言葉の通りであったのだ。

未知の異境で1カ月余の間集団生活をすることで、時には意見の対立や不満の爆発が生じたが、最終的には参加者一人一人が皆との協調を図り、楽しい研修旅行になったのである。

ただ、最後に特筆しておくべきことは、この素晴らしい研修旅行がまだ公認化していないことだ。そもそも1988年、本学と北京理工大学との間で公的なものとして始まったのだが、翌年の天安門事件で研修団派遣が一時延期された後、公認化が見送られてしまった。残念なことにあれから10年たった現在でも未だ大学が認める留学にはなっていない。近い将来の公認化を期待する。（ちなみにこの研修は過去10年間に8回実施し、計100名を越える学生が参加している。）

（ただ　しゅういち　経済学部3年）

◀万里長城にて
（99.3.6）

▲杭州西湖にて
（99.3.17）

◀上海雑技団
（99.3.25）

とよひらの空に虹をかけよう

── 豊平区民の歌の歌詞選考委員を務めて ──

寺　田　悦　子

皆さんは、札幌市豊平区に区民の歌があることをご存じでしょうか。豊平区では、区にゆかりのある方を対象に一般から歌詞を公募し、札幌市で初めて区歌を制定しました。応募作品は道内外の13歳から85歳までの50人から67点にものぼりました。どの作品にも豊平区に対する素朴で温かい思いが込められて、自然と文化が示す豊平区の豊かさ、明るくさわやかでエネルギッシュな生命感、希望に満ちて未来と世界に向かって前進しようという抱負などが伝わってきました。最終的に曲が付いて完成した区歌『とよひらの空に』は、優しく、どなたにも親しめるものだと思います。

区では1993年から「とよひら魅力作り事業」に取り組んでおり、これまでに区内の9つの地域ごとに住民、地元の商店街、企業、学校を中心として、各地域の特性や個性にもとづいたまちづくり団体が設立されています。ここ豊平地区では、北海学園大学と地域住民との交流による地区の活性化を目指して、「まちづくりフォーラム'97」が十月祭で開催されています。区歌制定の主旨は、これらの運動を連携し発展させ、住民主体のコミュニケーションの充実を図ることを目的に、気軽に誰でも楽しむことができる音楽、特に歌を通して広く区民の意識、参加向上を促すことにありました。選考作業を行いながら、豊平区の素晴らしさを再確認し、区が住民から愛されていることも知り、まちづくりとそれへ加わることの重要性について改めて考えさせられました。

今回の企画は歌詞の公募という形で住民が主体的に関与した点で画期的であり、まちづくりを推進するための精神的土壌が区民の間にあることも示され、有意義であったと言えます。豊平区のまちづくりにおいて重要な役割を期待されている北海学園に通学、通勤する皆さんに、ぜひ、区歌『とよひらの空に』を口ずさんでいただければと思います。

＊歌詞「区民のページ」『広報さっぽろ　豊平区版』1999年6月号（通巻第471号）p2より。

（てらだ　えつこ　本部事務局勤務・
大学院経済学研究科博士課程）

豊平区民の歌

～とよひらの空に～

作詩　高野（たかの）　栄美子（えみこ）
作曲　いなむら　一志（かずし）
編曲　西岡（にしおか）　俊明（としあき）

一
小さな勇気が　ほんわかひとつ
僕の心に　君の心に
みんなの心に　芽生（めば）えたら
豊平の空に　虹のアーチが広がる
優しい街だね　とよひら
心がふれあう　とよひら

二
夢を語ろう　確かな夢を
僕と一緒に　君と一緒に
みんなと一緒に　叶（かな）えたら
豊平の空に　熱い鼓動（こどう）沸（わ）き上がる
輝く街だね　とよひら
未来が待ってる　とよひら

ララララ　ララララ　ララ
ララララ　ララララ　ララ
優しい街だね　とよひら
心がふれあう　とよひら
輝く街だね　とよひら
未来が待ってる　とよひら

図書館開館時間変更のお知らせ

図書館(本館・工学部図書室)の開閉館時間が平成11年6月14日(月)から下記の通り変更になり、2部や大学院の授業終了後もゆっくり利用できるようになりました。ぜひご利用下さい。

開館および閉館時間

	本　館		工学部図書室
		1階自由閲覧室	
月～金	9：00～22：00	9：00～22：30	9：00～20：00
土	9：00～22：00	9：00～22：30	9：00～15：00

本館サービス利用時間帯

	月～金曜	土曜
貸出・返却（開架図書）	9：00～21：30	9：00～21：30
貸出（閉架図書・雑誌）	9：00～20：30	9：00～17：00
AVブース受付	9：00～20：30	9：00～20：30
〃　利用	9：00～21：45	9：00～21：45
レファレンス受付	9：00～21：30	9：00～21：30
他館利用願発行	9：00～21：30	9：00～17：00
コピー機利用	9：00～21：30	9：00～21：30

日本語ルーツ東西探訪（その3）

日本式カタカナ英語を考える（その一）

河　井　達　雄

「私はブラジル日系三世です。日本の国立大学に入学しています。日本に来て驚いたことは、私が自信をもって勉強した日本語と今の日本語が違うのです。カタカナが余りにも多くて、それが本来の日本語なのか、英語をカタカナで表わしたものか、または他（ほか）の外来語なのか区別できないのです。とにかく、日本語の勉強はやり直さなければなりません」

以上は、高校ユネスコ研究会においてのパネリストの発言である。

さて、日本人が英語の発音やアクセントをどの様に表しているかの例をいくつか挙げてみよう。

「このご婦人はすばらしい**キャリア**のもち主です」と、司会者が紹介をすると、あとでアメリカ人がその婦人に「どの様な立派な車をお持ちなのですか？」と質問したそうである。**キャリア**は運搬車、悪くすると伝染病保菌者の意になるので、物議をかもし出しかねない。

「今日は、××投手は**コ**ントロールが悪い」プロ野球の解説。「誰かの**ア**ドバイスを受けてコロンビア大学卒業としたのかも知れませんなぁ」ニュースキャスターの話。アクセントをこのまま正しいと覚えていると、センター試験などの合格は難しい。

「**クローズアップ**現代」NHK 番組にある。この発音はあり得ない。しかし、これは訂正不能である。今さらクロースアップとも出来ない。長年、日本語の中で定着して共通語となっているからである。接戦はクロスゲームと呼んで英語発音に近くなっている。英語が日本語に同化するときの変わり身は予測しがたい。

「**メァリー**さん」アメリカ人のメリーは、「私はメリーですと日本の方に名前を言うと、ああ**メァリー**さんですかと相手の方が仰るので、**メァリー**で通すことにしています」何とも解りにくい話である。お国がらによって人名の呼び方が違うのを、そこまでジャパニーズさんに要求するのは無理なようである。

「**エイズ**」外国人には通用しない。正しい発音はエイドゥズである。トランプの英語はカードであり、その複数もカードゥズである。アメリカにトランプのつもりでカーズ送れと電話で注文したら、自動車が送られてきたというコミカルな話を聞いたことがある。

つぎは、英語がどのように日本流に考えられているかの例を少し述べてみよう。

「昼の**ランチ**あります」町筋の立て看板で見かけた。すると、夜の**ランチ**もメニューにあることになる。

車の「**ハンドル**」「**アクセル**」「**バックミラー**」来年度採用予定の小学校四年国語教科書に出てくる。これらが英語であると身につけた子どもたちが、将来、国際社会に出て行く時に障壁にぶつかるのではないかと恐れる。〝steering wheel〟、〝gas pedal（米）、accelerator（英）〟、〝rear view mirror〟と小学校の先生方は教えにくいことであろう。**バックミラー**とは背中に鏡がついていることである。**ベービーカー**も赤ちゃんが運転する車という意で外国人は腰をぬかすかも。

「**メークドラマ**」ご存知有名野球監督の言葉である。英作文として採点すると気の毒ながら0点である。〝mark a dramatical ending〟が正解であるが、**メークドラマ**の方が説得力がある。

カタカナ英語は、英米の文化・文明・風物を日本人の感性や語感で、日本的な便利主義的な考えで表現したものである。それらが日本語の中では共通語として市民権を得ているのであり、一概に排除することはできない。

つぎに、英語がどのようにカタカナ化していくのか系統的に分類してみたい。

（かわい　たつお　元北海高等学校教諭・
TOEIC インストラクター・元 HBC ラジオ
「ワンポイントイングリッシュ」講師）

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.21　No.3（通巻 151 号）
本館　〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号　工学部図書室　〒064-0926 札幌市中央区南 26 条西 11 丁目
☎(011)841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード